

I 実践

1 研究主題

心豊かな児童の育成を目指した人権教育

～一人一人の個性を見出し、人間性豊かな児童を育てる第2学年の学級経営を通して～

(1) 主題設定の理由

本校では、「児童一人一人の可能性と人間性の基盤づくりのために」を基本理念として、知（かしこく）・徳（なかよく）・体（たくましく）の調和のとれた心豊かな児童の育成を図っている。それを受けて人権教育では、「人権教育の目標や内容等を、各教科・道徳・特別活動の特質に応じて、指導計画に適切に位置付け、指導の充実に努める」を目標の一つとしている。

そこで、学級活動や生活科の時間、道徳の授業の充実に中心に、様々な体験や学習を通して思いやりの心情を養うとともに、感謝の気持ちをもって分け隔てなく誰とでも仲良くできる児童の育成を図っていきたいと考え、本主題を設定した。

(2) 主な研究内容

ア 一人一人が安心して楽しく過ごすことのできる学級づくり

イ 学級の実態を把握し、心の教育の充実に図る道徳の授業

ウ 継続的な異学年交流活動を取り入れた生活科と特別活動

2 実践内容

(1) 学級づくりより

ア 笑顔であいさつ、朝の会・帰りの会

朝の出会い、帰りのあいさつでは、笑顔で元気よくあいさつを交わしている。一日のスタートには「元気に登校できたよかった、みんなと会えてうれしい」、一日の終わりには「一日よくがんばったね」と、そんな気持ちを込めて、声をかけている。朝の会では、共通の題でスピーチを行って、相互理解と実態の把握に役立てている。

イ 思いや考えを記録に残す「今週のニュース」

日々の出来事や友達との遊び日などを通して自分の思いや考えを文章や絵で残す「今週のニュース」を継続して行っている。先生に話したいこと・よかったこと・うれしいこと・こまったこと・家でのこと・学校でのこと・感じたことや考えたこと、何でも書いてよいことになっている。書く力に個人差はあるが、児童理解や児童との関係の深化に役立てている。教室に掲示して児童が相互に読み合えるようにしている。

ウ 誕生会

「おたんじょうび おめでとう」の会を給食時に行っている。一年に一度の特別な日を祝って、みんなでハッピーバースデーを歌い、「おめでとう」と声を掛ける簡単なものだが、祝われる子も祝うみんなも楽しみにしている。主役になって過ごせる時間が必ず巡ってくるのと、健康に生まれてこれまで成長できたことへの喜びと家族への感謝の気持ちを育てたい。

エ 学級のめあて「なかよく、かしこく」に向かって

学級のめあてには「なかよくとかしこく」を掲げている。児童は友だちと仲良くしたいと願っているし、勉強や運動を含め様々な能力をつけて伸ばしたいと考えている。しかし、成長過程にあり、自己中心になりがちな時だけに、トラブルが絶えない。児童の訴えをよく聞き出し、友だち同士で話し合っ解決できるようにしたり、素直に自分の行動を振り返れるようにしてきた。トラブルを経験しながら成長できるようにと願いながら指導している。

また、いろいろな活動を体験しながら自己の能力を伸ばせるよう、やる気や努力の継続を喚起してきた。

(2) 道徳の授業より

ア ビデオ教材「5等になりたい」（大日本図書）2－（2）思いやり・親切

小さい頃の病気がもとで4歳まで立つことすら出来ず、小学校に入って歩行器を付けても皆と同じように歩くことが出来ない主人公をからかうクラスメイト。しかし、マッサージの先生から「人としての本当のやさしさ・強さ」を教わり、明るくたくましく生き抜こうとする。そんな中、運動会で学級全員リレーに主人公が参加するか・しないかで、クラスは大論争になるという内容である。主人公の立場になって気持ちを考えたり、クラスメイトの心の変容を捉え、思いやりや親切という行為について考えさせることをねらいとしている。授業では、役割演技を取り入れて、主人公の悲しさや悔しさを言葉や姿で表現し、からかう級友たちが主人公の気持ちを理解して変わっていく場面を演じる中で、ねらいとする価値を実感し共感できたのではないかなと思われる。

イ「せかいの子どもたちは今・・・」（自作資料）4－（2）家庭愛・国際理解

文化や物が豊かな日本で生活する自分たちと、経済的にも社会的にも困窮しているミャンマーの子どもたちの生活ぶりを紹介し、そんな中で彼らを救うために奔走する日本人医師の話の簡単な資料にした。自分たちとあまりに違う環境や生活の様子を知り、幸せに気づくとともに家族に感謝の気持ちを持ち、物や生命を大事にしようとする気持ちが感想に書かれ、発言として多く出された。

(3) 継続的な異学年交流を取り入れた生活科と特別活動より

ア 生活科での1年生との交流

昨年小学校入学時に自分たちがしてもらったことを今年は「してあげる」側になって体験する活動が年間を通して盛り込まれている。4月の入学式に、入学した1年生と保護者の前で歌や劇で学校生活の様子を発表して、1年間の成長ぶりを示した。5月にはその1年生に学校案内することで教えたり、仲良く活動したりすることを学んだ。11月には自分たちが育てたサツマイモの収穫祭と秋祭りを一緒にして「なかよしフェスタ」を開いた。自分たちが考えた遊びを実際のお店にして1年生と自分たちの家族に来てもらって楽しんでもらった。時間をかけて準備や工夫をしたことが、みんなに楽しみ喜んでもらうことで充実感と満足感がもてたようだ。参加した保護者からもお褒めの言葉をいただき、また成長が見られたと考えている。学年末の3月には今年度の生活科でやってきたことを1年生に発表する機会を作る予定である。

他にも2年生の生活科には地域の自然や人と関わる教材があり、活動を通して人や物との関わりを学ぶ機会となっている。

イ なかよしタイムで4年生と交流

本校独自の活動として、6学年を4年生以上の上学年と1年生から3年生までの下学年に分けて兄弟学級を作って、年間を通して交流をもつ活動である。1学期に1回の長い昼休み時間に上学年は下学年が楽しめる遊びを計画して遊び、また年間に一度の交流給食をしている。1年間を通して、小グループを形成してそのメンバーで活動していく中で個人的に親しい間柄となっている。個別に休み時間に遊ぶ姿も見られ、上学年は下学年を面倒みながら上学年としての意識が高まり、下学年は甘えて楽しませてもらいながらも次は自分たちがそうしていくことを自然に学んでいる。校庭の広さから他学年のなかよしタイムの時は外に遊びに行けなくても子どもたちは自分たちの「なかよしタイム」を楽しみにしている。兄弟が少なく、放課後外遊びをしない子が多くいる中、この活動は『人と関わる体験を通した心の涵養』としてたいへん役立っている。



(なかよしフェスタですごろくを楽しんでいる様子)



(なかよしタイムで4年生と一緒に)

3 成果

学校というひとつの限られた時間と場所で、児童が自分の居場所を見つけ、自分らしさを知りながら、これからどうなっていきたいかを考えていくことが「人間性の育成」と考える。周囲の人と関わることで、人の痛みや人からの優しさを知ることにも出来る。

児童は自然や生き物、そしていろいろな人と関わる体験を通して、自然の美しさに目を向けられるようになり、命の輝きを感じて、優しい気持ちが育ってきている。また、友だちとの関わりの中で失敗や間違いがあっても、ごまかしやせず正直に自分を見つめ直したり、誤りを正したりすることができるようになってきた。何事も諦めずにがんばっていこうとする姿も見られている。上級生にしてもらったことを同級生や下級生にしてあげようとする気持ちが育ってきている。声を掛け合って、励まし合ったりなぐさめたりする様子も以前より増えたように感じている。

学習・生活全般を通して、友だちのよさを発見し誰とでもなかよくしようとする姿勢が育っている。

II 今後の課題

子どもたちの人権意識を高めるために、日々の学校生活の中で、身近にとらえられる例を挙げ、場面を作って、「人・もの・こと」との関わりの中で、人としての生き方や人への接し方のよさを求めていけるようにしていきたい。そのためにも、新たな発見や気づきをつくり出せるように児童の実態に沿った具体的な体験活動を組み入れたり、意図的に学習活動の構成・展開を図ったりするようにしていきたい。